

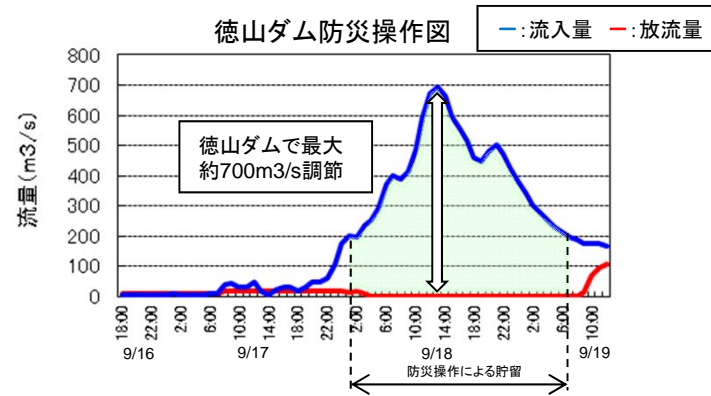
平成24年9月洪水における揖斐川本川の水位低下効果 — 徳山ダム・横山ダムの効果 —

- ・平成24年9月洪水では徳山ダム・横山ダムによる防災操作の実施により、徳山ダム・横山ダムがない場合と比較して、揖斐川の万石地点(河口から約40.6k)で約1.2mの水位低下、今尾地点(河口から約27.0k)で約0.9mの水位低下をしたものと試算しました。
- ・仮に、徳山ダムと横山ダムができていなかった場合は、今尾地点でははん濫危険水位を超過したと推定されます。

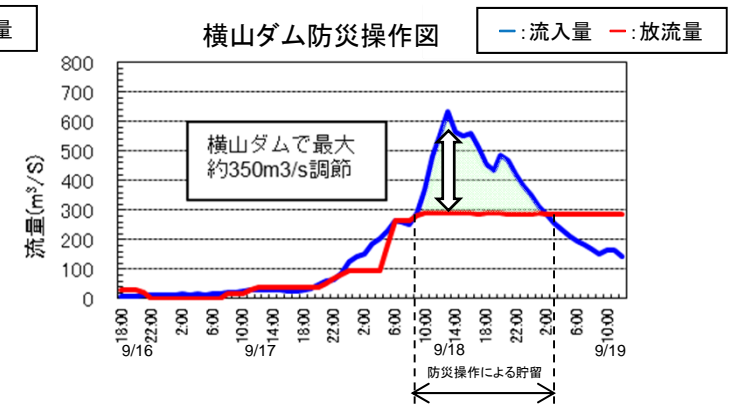
●位置図



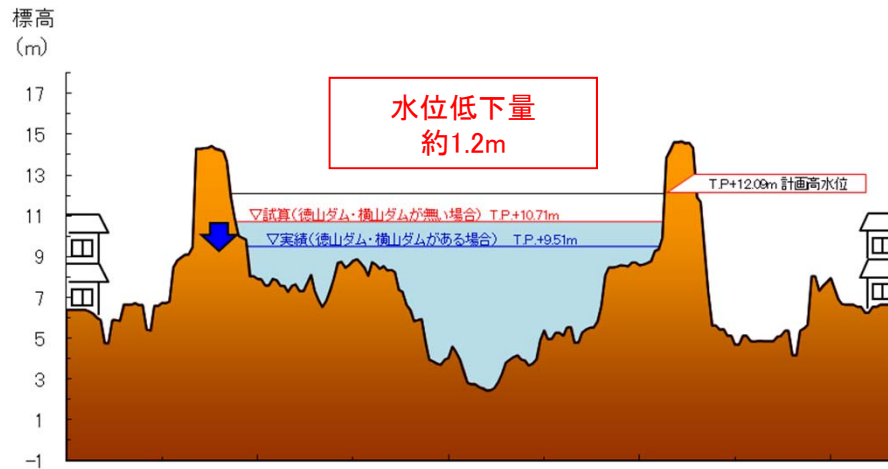
●ダムの防災操作(徳山ダム)



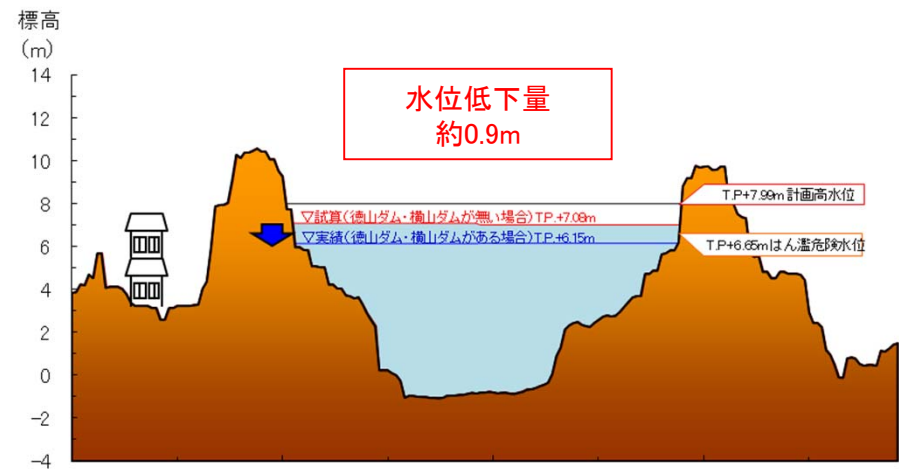
●ダムの防災操作(横山ダム)



●水位低下効果(万石)



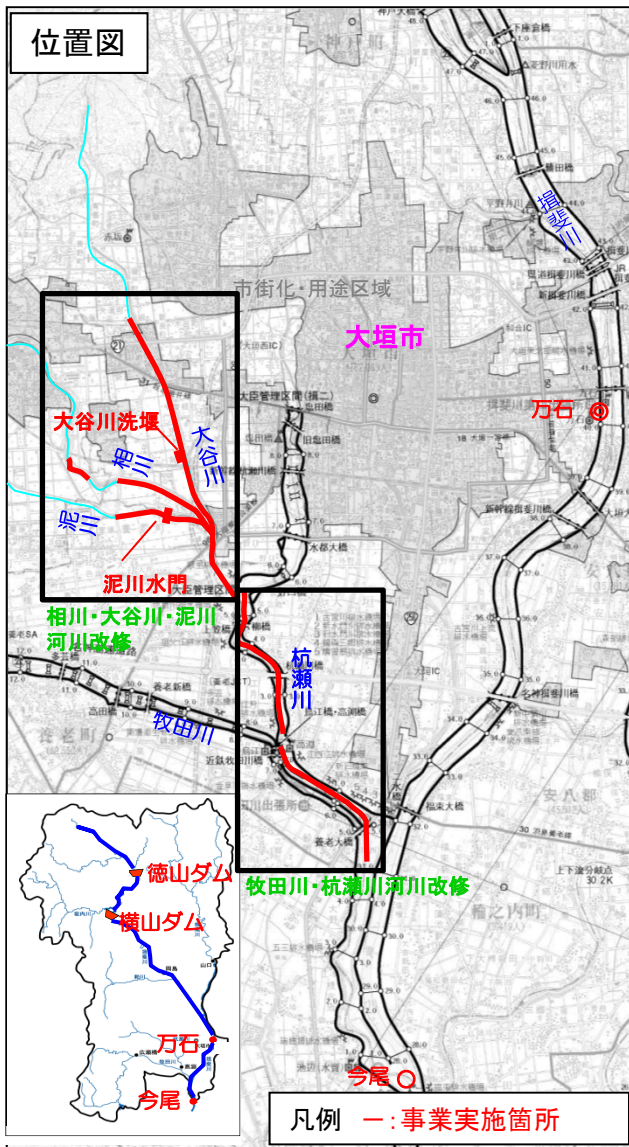
●水位低下効果(今尾)



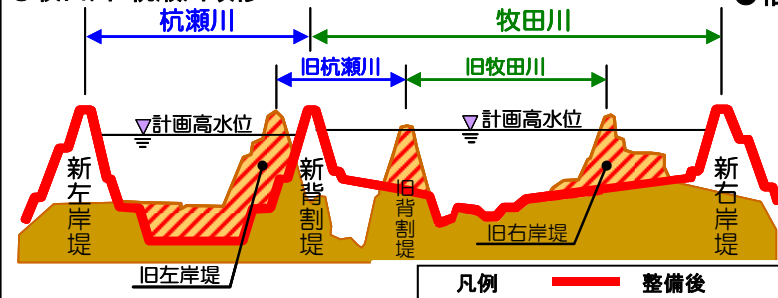
※はん濫危険水位とは、当該地点より下流の堤防整備状況を確認した上で、この水位を超えると相当の家屋浸水等の被害を生ずる恐れがある水位として設定したものです。

平成24年9月洪水における揖斐川支川大谷川・泥川の水位低下効果 — 徳山ダム・横山ダムの連携した防災操作、河川改修 —

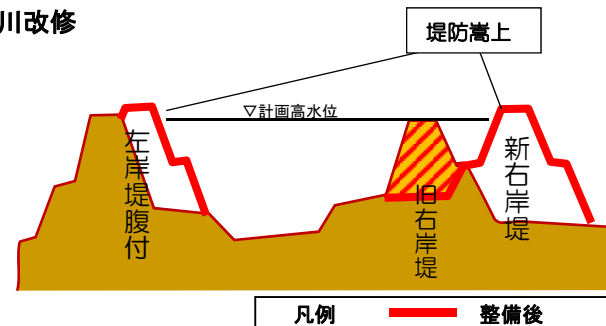
- 平成24年9月洪水では、徳山ダム・横山ダムの連携した防災操作の実施及び支川の河川改修により、支川大谷川の大谷川洗堰で約0.5mの水位低下、支川泥川の泥川水門下流で約0.5mの水位低下効果があり、さらに、泥川水門の整備と併せ泥川水門上流では約1.1mの水位低下効果があったものと試算しました。
- 仮に、ダムの防災操作の実施や河川改修、及び大谷川洗堰の嵩上げができていなかった場合は、大谷川洗堰からの越流による浸水被害が生じたと推定されます。



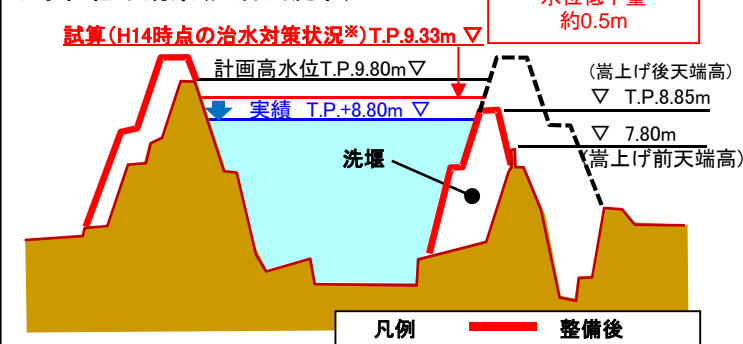
● 牧田川・杭瀬川改修



● 相川改修



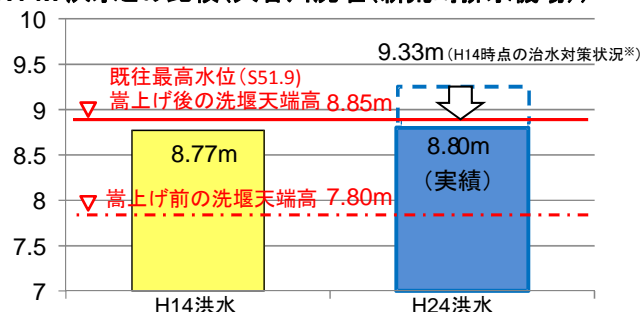
● 水位低下効果(大谷川洗堰)



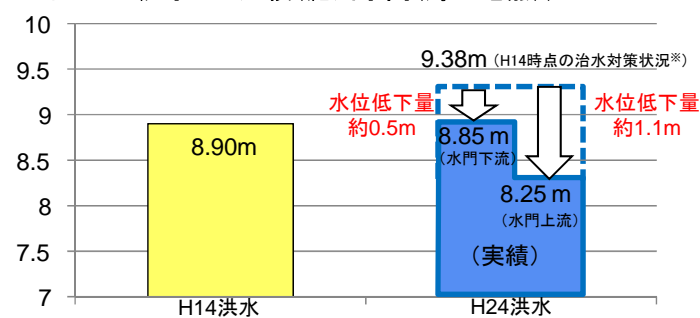
● 泥川水門の整備(相川からの逆流を防止する。)



● H14.7洪水との比較(大谷川洗堰(新荒崎排水機場))



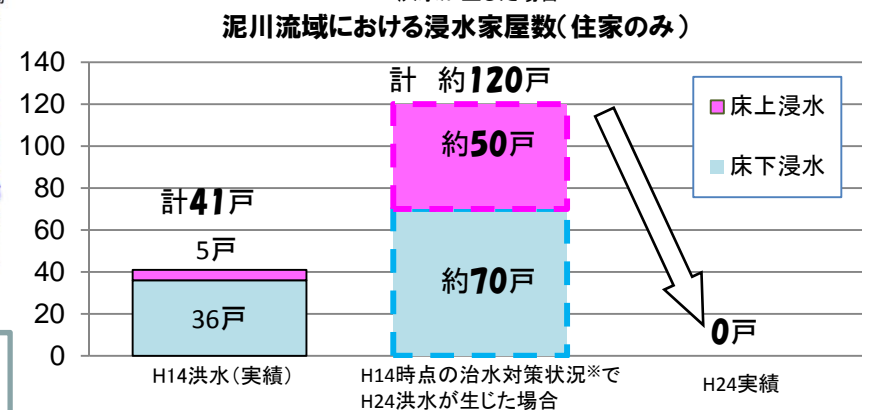
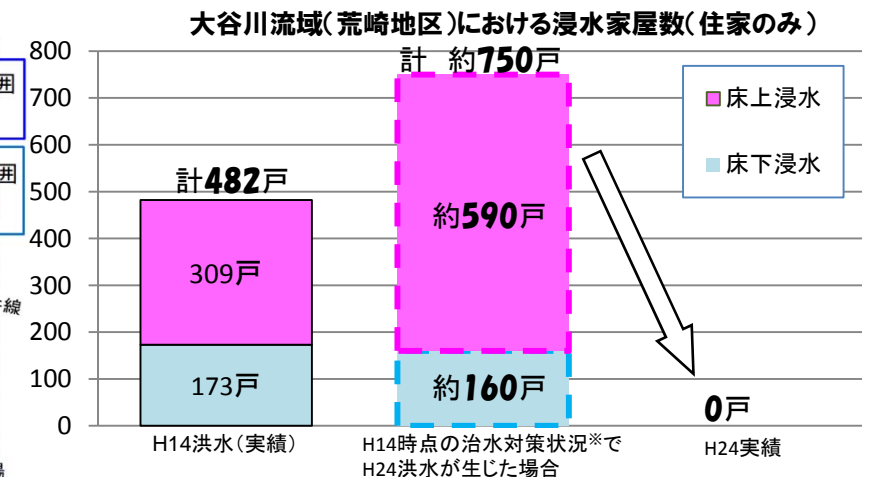
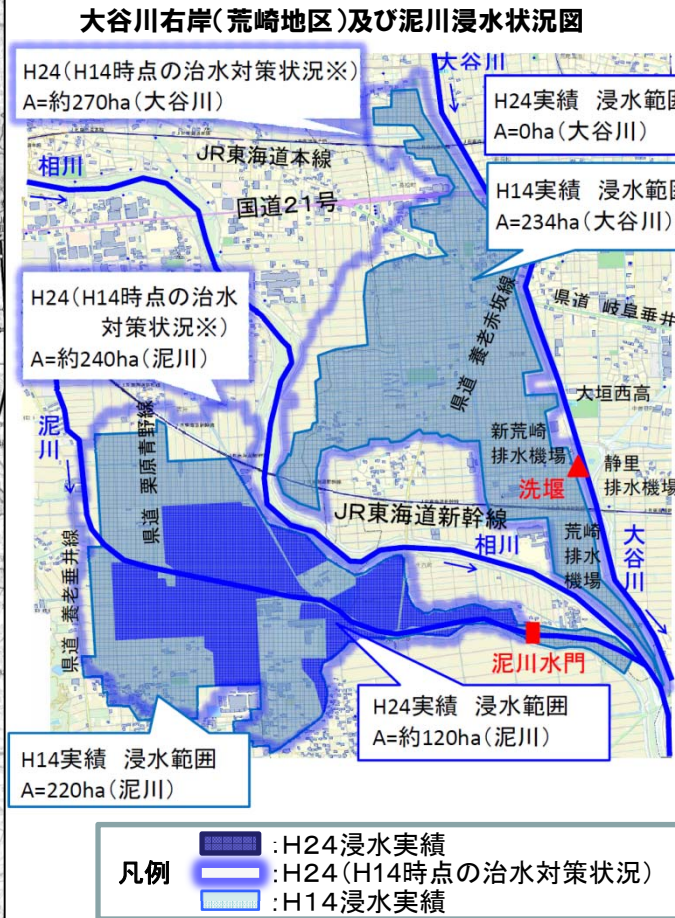
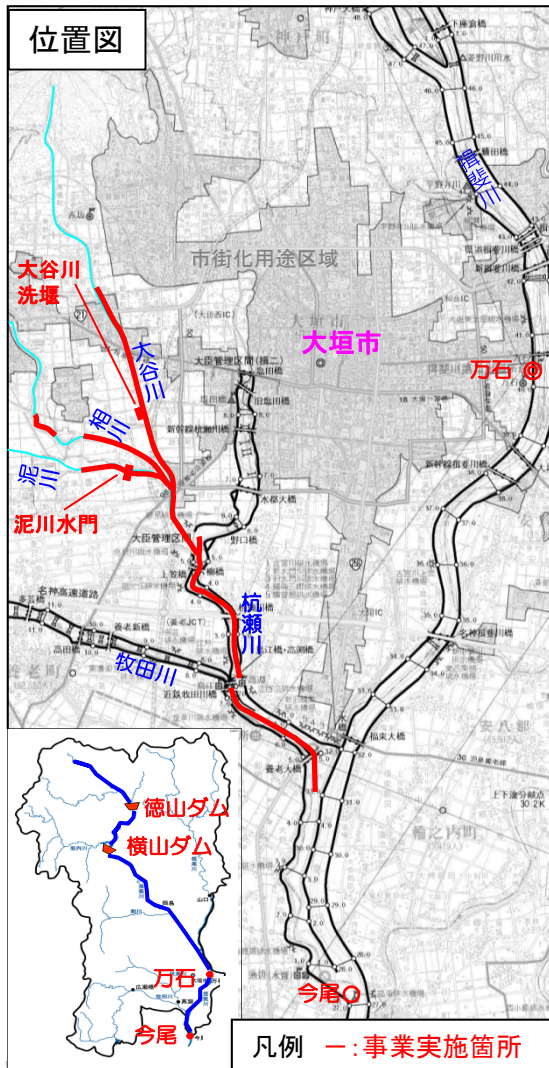
● H14.7洪水との比較(泥川水門(野口地点))



※H14時点の治水対策状況: 揖斐川流域で大きな洪水被害のあった平成14年7月洪水以降の治水対策(徳山ダム建設に伴う徳山ダム・横山ダムの治水機能の向上、支川改修)を実施していない状況を想定したものと推定されます。

平成24年9月洪水における揖斐川支川大谷川・泥川の浸水被害軽減効果 — 徳山ダム・横山ダムの連携した防災操作、河川改修 —

- 平成24年9月洪水では、徳山ダム・横山ダムの連携した防災操作の実施や支川杭瀬川、牧田川、相川の河川改修、大谷川の洗堰嵩上げ、泥川水門の整備により、大谷川流域では浸水被害を回避でき、泥川流域では家屋浸水被害は生じませんでした。
- 仮に、これらの施設が整備できていなかった場合は、大谷川流域では浸水家屋が約750戸、泥川流域では約120戸という平成14年の出水を超える被害が生じたと推定されます。



※浸水家屋数は、洗堰については新荒崎機場地点の水位が、泥川については野口地点の水位が、そのままの高さで氾濫域に浸水すると仮定して算出したものです。

※H14時点の治水対策状況: 揖斐川流域で大きな洪水被害のあった平成14年7月洪水以降の治水対策(徳山ダム建設に伴う徳山ダム・横山ダムの治水機能の向上、支川改修)を実施していない状況を想定したものの。

揖斐川支川における近年の主な治水事業

参考

揖斐川支川の相川、大谷川、泥川等は、勾配が非常に緩く、揖斐川本川や杭瀬川の水位に大きく影響を受けます。そのため、これらの支川の洪水を安全に流下させるために、次の河川事業を行ってきました。

- ・揖斐川本川水位の低下・・・徳山ダム・横山ダムの治水機能の向上
- ・杭瀬川の水位低下・・・牧田川・杭瀬川の大幅な拡幅
- ・相川・大谷川・泥川の改修・・・築堤、泥川水門、大谷川洗堰嵩上げ

